《特選》

知ること

中央中学校 二年

尾本 芽唯 さん

私の弟は、発達障がい者だ。人権学習をするとき、一番最初に頭に浮かんでくる。発達障がいとは、身体や学習、言動、行動の何れかにおいて不全を抱えた状態のことを言う。

弟が発達障がい者というのを知ったのは、小学四年生のころだ。お父さんから聞いたときは涙がでた。なぜなら、「発達障がい」という言葉をまったく知らなかったからだ。その時、私は、「弟は、まわりのみんなとは違うんだ。」とマイナスな考えをしていた。つまり、私は、発達障がい

いを悪い意味ととらえていた。悪い意味でとらえてしまった自分も嫌だった。

しかし、何も知らない私は、弟の障がいについて、十分に考えることができずにいた。マイナスな考えとともに、

「弟を守らなければ。」と思っていた。自分で勝手に「発達障がい者は、いじめられてしまうのではないか。」と考えていたからだ。私は、何も知らないのに。「みんなと違うから。」といって、いじめられるという差別心のようなものからきたと思われる。

私は、発達障がいについて、自分なりに調べてみたりした。すると、発達障がいにもいろいろな症状があったり、周りの環境の工夫だったり、初めて知ることが多くあった。中には「発達障がいなどの、目に見えない障がい以外にも、目に見える障がいの人

達のこと。」など、少しだけ知れた。

私は、この「少しだけ」でも、自分の考えが百八十度変わった。「発達障がいはいが悪い意味ではなく、隠すものではない。」と思った。また、私は、「もし、弟が発達障がい者では無かったら、私はずっと知らないままだったのだろうか。」と考えた。障がいのことを「知ろう。」とも思わなかったのか、と。

私は、実体験と人権学習を通して、「知ること。」は、とても大切なことだとわかった。人は、誰にでも差別心はあり、偏見とウワサで決めつけてしまうときがある。しかし、私は、偏見やウワサで終わるのではなく、本当のことを知ってほしいと思う。四年前の私は「みんなと違う。」ことはマイナスなことだと思っていた。しかし、今では「違うことは、自分だけの個性。」

と、プラスなことと考えるようになった。この考えは、すべての人にあてはまることだと思った。人権学習の中で出てきたように、差別が自然に無くなるのではなく、知って理解し合うことが大切だと思う。

《選評》

当初は、発達障がいや悪い意味で捉えていたことを正直に述べています。そこで、「無知」であることが差別につながる「気づき」、実体験や人権学習を通じて「知ること」が大切だと理解するようになった点に注目しました。「気づき」「知る」ことにより人権感覚がアップデートされていくところが表現されていますので、その点を評価したいと思います。

(武部 康広)